



初等中等学校での不登校に対する心理社会的介入の効果



中程度の質のエビデンスによれば、認知行動療法（CBT）は学校への出席を増やすが、不安に対しては効果がない。

本レビューの目的

このキャンベル・システムティック・レビューでは、不登校に対する心理社会的介入の効果を評価する。本レビューでは、8の研究から得られた調査結果をまとめている。

深刻な感情的苦痛を抱えた生徒に対する認知行動療法（CBT）は、学校への出席を増加させるが、不安に対しては効果を持たない。

本レビューの研究対象

感情的苦痛によって登校に困難を抱える生徒は登校を拒否するかもしれない。無断欠席と違って、不登校は生徒の恐怖、不安、憂鬱によるものである。本レビューでは、心理社会的介入に関する研究をまとめる。これらの介入は主に行動療法であり、リラクゼーション、ソーシャルスキルトレーニング、認知行動療法を含む。

本レビューでは、不登校への心理社会的介入が不安を減少させ、出席を増加させるかどうかを評価する。

レビューの対象となる研究

435人の不登校の就学年齢の参加者を対象とする、8の研究が本レビューではまとめられている。

本レビューで対象となるのは、1980年1月から2013年11月の間に公表された厳密な評価である。薬物治療の効果のみを測定した研究と居住型療養センターにおいて行われた研究は含まれていない。一つを除いて全ての研究は認知行動療法の変形版の効果を測定したものであり、大半は診療所環境で行われた。

本レビューにおける主要な結果

中程度の質のエビデンスが示すところによると、認知行動療法（CBT）は学校の出席を増加させるが、不安には効果がない。

不安に対する心理社会的介入の効果は統計的に有意ではなかった。出席に対する効果はかなりのものであった。

本レビューの対象となる研究のほとんどにバイアスに関するいくつかのリスクがあり、そのリスクは評価された効果を上向きに偏らせる可能性があった。



対象となった多くの研究は、どのようにして参加者をランダムに治療群あるいは統制群に割り付けているのかを明確に説明していなかった。したがって、8つの厳密な研究から得られた、治療効果に関する最新の推定は、注意して読まなければならない。

結果が意味するもの

学校は若者の発達に関する重要な一部である。それゆえ、全ての子どもが適切に学校にかかわることが確実にできるように、不登校に取り組むことが重要なのである。最も頻繁に研究されている不登校に対する介入は、行動療法アプローチと認知行動療法（CBT）である。これらのプログラムの目的は、若者の不安を軽減し出席を増やすことである。

エビデンスは、不登校の治療における認知行動療法（CBT）に不確かながら根拠を与えている。しかし、確かな結論を導き出すには全体として厳密な研究が不足している。これからの研究においては、サンプルサイズをより大きくし、潜在的なバイアスに注意すべきである。研究においては、また、厳密な評価のための他の種類の介入も検討すべきである。長期的な効果を評価することで、出席と不安に関する介入の効果に関する混在した調査結果に対してさらなる見識が得られるかもしれない。

本レビューの最新度

本レビューは2013年11月から執筆開始し、2015年5月に発表された。

キャンベル・コラボレーションとは

キャンベル・コラボレーションは、体系的なレビューを発表する、ボランティアによる非営利の国際研究組織である。我々は、社会科学と行動科学におけるプログラムに関するエビデンスを要約し、質を評価している、我々の目的は、人々がよりよい選択と政策決定を行うことを支援することである。

このサマリーについて

このサマリーは、キャンベル・システマティック・レビュー2015年12号に掲載された Maynard, B. R., Brendel K. E., Bulanda, J. J., Heyne, D., Thompson, A. & Pigott, T. D.による「初等中等学校生徒における不登校への心理社会的介入」に基づき、Gary Ritter (University of Arkansas) により作成された (DOI: 10.4073/csr.2015.12)。Anne Mellbye (R-BUP) がこのサマリーを構想し、Howard Whiteにより編集されTanya Kristiansenより作成された（両者ともキャンベル・コラボレーション）。